



頌

吟來幾度覺高情先
哲遠編七部名奧旨玄
風雅闡玄憑 君合目
始通明
正 辱交頌堂惠



幸蒙著不 謹啟 序

此是之若風雅乎
於心之四時哉友
花亦何之於
子安之於
牙何之於

く後早舟や安しきるる歌
み歌す夷歌あ歌成生
し夫造化ふあしひ造化は
つをを蕉翁の風雅乎し
子歌及のあ化をみいお
なる三をく唯自然成楽外
ちし一猿蓑を俳詞乃古今集
あま初学のあ人去来うさ
若よる書海乃俳詞子入
岩屋儀と猿のあを上の集
あ架けさのひさくう曲
云らんる花畑の詩父郭う古

三十一ノ子ヲ買乃一三三銭ノ
志願ハ取成ノ旨ハおきぬて
路モ先ぬ何果越乃初志ニ進ル
余情ヲ探ル冬取乃机ノ
多也ノ見しと終ふ何ふ路ヤ石
山志ヲ果スル持乃本ノ力也子
存子成扱ハ彼先と後ノ
すの也逆志抄ノ名つけさ
骨ノハのやも立所能事
るし

榎村坊主然居士自序



蕉翁の俳諧における名やこの道の
 杜子美の如く昔子の俳は李白取
 るるのら次嵐雪太すは朱毛に似
 一蓮丈草ハ淵明の風あり白は魂の令
 言外情あつめ架あるを七五の文字
 以尾をく後人の解へし時あ

ルハまゝに置哉と云ふはさるるもの御座り
まゝ時ハ必掬居るものと云ふは蕉の句
を解寸らまゝと云ふは實景ハ杜子
の句と云ふは落葉と云ふは心ゆく國の
の句らひは手紙と云ふは古歌
らあつてと云ふは傳をたて九早と
述ふと云ふは蕉翁の曲と云ふは
たゞと云ふは身念の句と云ふは採句と
云ふは尋常の句の其の句探り
たゞと云ふは一むと云ふは採句と
元禄の句と云ふは採句と云ふは
中世の句と云ふは採句と云ふは

くるる一徹まみふらひ甚きもの
操りて人の能くとも雲泥の区
ひあり強く解せんともハ返て能
くさるる操りてふらひ一徹ま
くらむとなきはくはくは時ハ初
能くは何とて一徹まみふらひ
教んや一徹まは解りてふらひ
毛己の命に能く援手するは
一徹ま全抄も於てまの命一聞
く也とて能く能く能く能く
とやひてふらひの故にあり
一徹まは我師室然居てま

のふらふら蕉心句の風くさるる
元禄のう情を採り猿蓑の抄
さうさう初学の俳をるるあす甘ん志
やむと解まのハ辭をさうさうと書
する事あふさうさう言の豁然
か〜〜蕉心句の自作に母とて
実を源にさうさうの及るの俳者心師者に
曰魂の入さうさうハその余情筆にあ
〜〜又前者の俳情勝方余情
余光一定〜〜二三子試み抄
を措梯尔〜〜蕉心句の素直
今猶抄のあさうさうと改む

乃くハシムル大成す〜ハ其の
 處ニシテ一日好ムル也
 是と清の序か〜の流志也

猿蓑集百十五人

芭蕉翁

姓平氏松尾字桃青伊賀國柘植郷赤坂の産
 初名を宗茂と号し又宗房と云同國上野城代藤堂良
 精嫡良忠と近仕す寛文六年秋二十三歳〜して仕
 致し洛の北村季吟翁と遊學し歌連の蓋真と探り友
 人北向雲竹の筆意を學ひ後一風を爲す延宝六年江
 戸に來り深川長慶寺佛頂和尚と參禪す後芭蕉菴桃
 青と稱し一風の俳諧を興立す元禄七年冬十月十二
 日大阪の寓居ふ〜して寂す時年五十一也江州粟津
 義仲寺に葬る其角と稱す終焉記に書す
 其角 榎本氏江州膳所候の醫師堅田の産東順の子
 小晋子其角と号す是ハ易の文に因て也又室井と稱
 室晋齋と号す儒を服部平助受け醫草刈三越と稱

学ひ書ひ佐玄龍小学ひて後一家をとり畫成能友曉
雲子一蝶小学ひ詩并易学以鎌倉大巖和尚小学初
名以螺舎と号し蕉翁の一の高足りて三百餘人の
門人角り上ひ立ひのち性活達小て言行小酒
落也好酒李白り風韻をうらやむ世子放蕩と称る
ハ誤也室永四年二月廿九日没行年四十七麻布二本
榎上行寺

嵐雪

服部氏淡州小榎並村の産ひて幼名以久馬助
と云長りて東都に遊ひ新庄隱居候子仕へ又井
上相州候に仕小彦兵衛と称し俳名を治助と云後嵐
雪と改雪中庵と号り隱遁の後禪を学り宝永四年
三月十三日五十七歳ふりて卒駒込
常檢寺に葬り蕉門文学の一人也

去来

向井氏名義焉俗称平次郎肥前長崎の産ひて
彼地聖堂祭酒の氏族世々儒を業とら父向井玄

勝京師に至りて禁中の醫官とされ去来亦兄に随
て京師小至り某の殿下小仕小兼り醫學小長り詩歌
を究ひ射術に妙を得たり詩六つ諫小武故
業とすし書と落柿舎ハ嵯峨の別業乃号し室永元年
甲申の秋九月十日卒東山真如寺に葬り中華蕉門乃
高弟と称り此集の撰者也春秋五十三歳

丈艸

内藤氏尾州犬山長臣壮年武を辞して出家し江
州松本の山上小隱り嘗て詩作を嗜む石川犬山
り風操以慕て自丈草と号り去来り許に蕉翁子
謁し夫も俳諧以学小其角嵐雪去来丈艸こま蕉
門の四哲と称り後龍ヶ岡に閑關して出さるり三年常
に法華經を讀誦す室永元年二月廿四日卒年四十四

允兆

龍ヶ岡の佛
幻庵と称り信州諏訪乃産也
加列の産醫を業として浴小居蕉門頗る騷客也
此の撰集以去来と共に名字未詳

乙州^{ヲトクニ} 江州大津に住る名字
事跡可俟後考

千那 江州堅田本福寺住職妙式上人
稱嘗て律師小任る蒲藷坊と号
出羽國坂田の人醫家業とす通称

不玉 伊東玄順淵菴と号
河合惣五郎と称す祖翁元禄二年奥羽行脚に山

曾良^{ヲラ} 川道路朝夕の勞をたらく其旅行の始剃髮惣
五改て宗悟とす
奥細道見へた

杉風^{ト尺} 俗稱鯉屋藤左衛門と云東都官魚屋ふして小澤
一族蕉翁助力の門人也享保年中九十有

嵐蘭^{採茶菴} 松倉氏甚右衛門と称す肥前島原古城主の裔也
母ハ田中宗夫ハ孫にして嵐蘭亦外祖の武を継

千里^リ 八月廿七日卒谷中感應寺々中又葬り
又知利と書江戶小住す大和葛城郡竹の内産
名字未詳貞享元年翁は随て古郷小至る其時

荷兮^{尾州} 尾州名古屋の住檀木堂
号曠野集め撰者也
姓越智尾州名古屋

越人^の 越人名字未詳
江州平田遍照寺の住職亮隅上人と号當寺十四

李由^{世也} 世也買年と称し四梅廬と号宝永二年六月廿二
日四十五歳
にりて寂す

路通^{濃州} 濃州の産大坂に住す
八十村氏

北枝

立花氏加州小松の産金澤に住立花牧童の弟也

露沾子

奥州岩城々主内藤左京亮義泰の弟也
又傍池亭と

号露言沾涼皆候の門人也當時日向臼杵郡延岡城主其の裔也

蟬吟

伊勢津候の長臣伊賀上野城代藤堂新七郎良精の嫡主計良忠と称る蕉翁の舊主也洛の季吟門

人寛文六年四月日卒

探丸

蟬吟の弟也蟬吟世故早才故に家以襲ふ

杜國

名字未詳三河國保美村の産也一蕉翁芳野行脚の勞の取けし自万菊丸と称童子の如く

師小事ふ乾坤無住同行二人と翁と共ふ笠の内子書付たる一人あり風騷に長せり人也

曲水

江州膳所侯の長臣菅沼外記と称す曲水没後其妻尼とありて破鏡と号言行畸人傳小見

風麥

小河氏伊賀上野の藩士也

土芳

版部氏平左衛門と称る風麥の藩友也

尚白

大津の人也江左三益と称る木翁と号享保七年壬寅七月十九日没壽七十三

木節

大阪の人醫以業と号名字未詳

卯七

向井氏長崎の人去来り弟也

魯町

同上名字未詳

山店

江戸の産石川氏北鯉の弟也

遠水

江戸の人樋口氏五郎
兵衛町に住す

普船

江戸の産佐保氏甘雨亭と号、後介我と称す享保三年六月十八日卒、春秋六十七歳、浅草本願寺中

等光寺小
葬

山川

江戸の産名字未詳其角、門人也角、筆意を学花つゝ集らば山川、清書たる可雑談集に出

巖翁

江戸の人也其角、親友以下名字未詳

龜翁

岩翁の子也

全峰

江戸

花紅

全

溪石

全

卜宅

全

巴山

全

宗次

全

落梧

全

揚水

全

元志

全

嵐虎

全

嵐推

全

素男

全

柳陰

全

等哉

奥細道小越前福井小隠士等載と云人

を尋し見
力り同人、

竹戸

美濃

如行

全

子尹

全

史邦

京

暮竿

長崎

鳥巢

三河

塵生

加州小松

野童

加州山中俗稱
泉屋久米之助

挑妖

猿雖

良品

示蜂

祐甫

槐市

勾空

全金澤

長和

百歲

以下伊賀連衆
名字未詳

車來

半殘

須琢

万乎

杜若

少年

卓袋

一啖

水同

澤雉

石口

長眉

一桐

裾道

魚日

木白

配力

園風

利霄

式之

昌房

以下膳所の
俳士

盡好

游力

里東

探志

及肩

蟬鼠

支幽

泥土

怒誰

朴水

正秀

且藁

以下尾張
名古屋

芥境

羽笠

薄芝

杉峰

野水

何處

大阪

之道全

珍碩

江州湖南

智月

尼 大津乙州
母也

羽紅

尼 京凡兆
妻也

田上

尼 長壽

千子

京向井益壽院法印
元丹ヲ女元桂ヲ妹

去來
姪也

款子

伊賀

坂上氏

津國山本

扇 膳所

遊女

奧州

東都新吉原茗荷屋名妓歌俳香茶に長
最能書の聞へ世ふ知処也其産ふ因

て名付しとかや

集採共計一百十五家
 句選統載四百十八吟
 歌仙四卷百四十四句
 幻住菴記并詩凡右日記
 丈草漢文跋

猿蓑ききの巻之一

晋其角序

晋子其角は集の序を書き祖翁新風興立し末代蕉門の
 亀鑑と云ふなり凡北撰志たること之は祖翁於
 骨の俳諧を定まらるる集多きは集令初の始末を
 のしりて末代蕉門の心は元一の温奥にかけられ
 世抄とあり亦晋子序文の意を以て言外の旨を撰
 びて序文の意を以て序文の意を以て序文の意を以て
 俳諧序文の意を以て序文の意を以て序文の意を以て
 撰したるは初学のしもの撰抄外の旨を撰したるは
 要するなり

俳諧の集はるる古今なりてける
のたりに起つる時をまや

此集改撰のたりに俳諧者流盛なりて宗鑑守武より貞徳
宗因よりまうりて宗因は今と称し宗因守武は古よりまうりて
貞徳は遠より宗因は今と称し宗因守武は古よりまうりて
古今の俳諧は渉獵して世道のためなりて起るる時をまや
といふまゝ之面起るる面目ありて今面目を起
る時をまやといふまゝなりて起るる時をまやといふまゝなり
一 俳諧の恥を受るるものに面を俯り譽をほるるものに面
を起るるのたりに起るる時をまやといふまゝなり

長嘯子う拳白集ふ大和歌ぬまのりふ大長より表社の色り子
うう思ふ一しみおふはけりてはらうすまみはさるる母まう
ありてん神は月花もねりてお守へり時をまやといふまゝなり
ありて書るる時をまやといふまゝなりて起るる時をまやといふまゝなり
俳諧のたりに起るる時をまやといふまゝなりて起るる時をまやといふまゝなり
起るる時をまやといふまゝなりて起るる時をまやといふまゝなり

幻術は才一としてその向ふ魂の入るる由
ありて色もるるふれりて

幻術の字書に吞刀吐火植木植瓜の術は是也といふまゝなり
ハ今乃子書きまをりて又妖術飯綱まは幻術也

のたすしひしひ字と用ひられたり一字書かざるは五徳五身
吾音よ美しと云う月ひらとて一若く白く魂のまけれぬ実
情をいへば実をけれ感あり感ありと只此の一言半句
魂成のり中乞祖翁の幻術をこれ安情の備るなり時八百
百化もふ家のあまふるの心とて一謝はの集つるは
神とて不意のあな成さしりむをいふとて一徳とて一
是との西の白作のり成りて次の段に五徳いと云うて謝
の徳と奉とてとて西行上人の撰集抄の古るすと引
出とて文勢とたくとてとてとて

五徳ハいふ不及ん心がこころよあ

あゝたのり

五徳ハ仁義禮智信の五徳之是ハ天より人へ受得るなり
性徳をいへば人へ賢不肖の遠ひたるを備はざるは
さき朱子も仁義禮智の性と大学の序も説きとて性
ハ人より人へ受得るなりとて是人へ備はれ
る徳之蒙引ハ徳ハ得るなりとて人へ受得るなりと徳
ち五徳ハ仁義禮智の總名と周季侯がいへば一
と名も一徳とて一徳ハ信なりと仁義禮智の
なるなりとて信なるなりと蒙引ハ信なるなりと五
徳なりとて人へ受得るなりと徳なるなりと

仁義禮智信の善一何んを以て之を温良恭儉讓を
其六孔夫子の所余人の備るる所も亦其徳は子
及之れと云ふや又徳えう能はざるは五ツの徳行とい
ふは奉てけむ徳有りといふも亦其徳也

彼西行上人此骨亦人を作らざる高きハ
其子なる笛を吹やうかちん侍ると言はれ
る人年ハ未だ侍るも其の年々の已るを
其徳ハ友魂乃法のとりて侍るや

かの西行上人のとい探集抄上人言聖の奥は行は
たしくかゝるいゝ聖の京へまゐるは後累同くうそ也

といふは母の情をわねまらん友も恋しく言ふ
其徳又先骨とてはうて侍る人の徳も似
侍るは色も所くもてかみく侍るも亦
徳のありてはあはれ人も心うの
七かくもははるる徳の生るる謀カリゴトも
むもははるる徳の生るる徳もは
しむる野大なる徳の生るる徳もは
魂の入るの徳もははるる徳もは
徳もははるる徳の生るる徳もは
徳もははるる徳の生るる徳もは
徳もははるる徳の生るる徳もは

う方か引くりてせらば悟らまうしき。通一さま六下り
いふ所の魂や文章か力と入てけな文の魂哉こしうくも
五音の聲のまうきさるは五音の傳をさるまやま
かるといふ又五徳のあ引くりて書るんと味ふ通一
及魂の法は探集抄の詞とつてぬる魂の術を或日
く何といふ或文といふるは術にたてと訓を法もたて
訓も同意之は文章も古するは文章と取て文を習
義や通ずるの如くあらまうといふもといふも
やうしてまがぬおといふまゝの家か又一匹の文
いふまゝ終ると又一匹都會こ位の序文也文章ハ位の
かつらとよくまがぬ

さぬたすーみお入きまハアイウエラ
よくひまをいふか舞のたすもさぬ
通一

さるは上代文て下をたさるの詞かたの如く
はといふ義か同一魂の入るはら句を魂の入
姿情を突らまうたらはといふ義のアイウエラ
日本五音の惣本より是をりそく韻ふま生す
かゝるもけ五音よく通すはかふか義なり
上より下の五の音をよきまがぬ
まがぬ

るものきつて五音を通してとてわくく魂の在る
たまりたるんといふは名詞句も吟し
出さるるしといふ事今者六文字の外も多
りやう何れも吟する句の情も成り定れ
のゆゑに成りて無一漢文或ハ詩句も
今者といふ事一とてこれハ歌連俳
といふものなるべし一句一
は等といふ事とて生涯俳社ハ
るるか

只俳諧を魂に入らるる舞ふて

翁行脚の了ら侍賀哉
もて猿々小暮と着せ
成入るまはたちやち
たれいひ叫ひも舞あはに
幻術なるも

只俳諧を魂の入らるる舞ふてとて
とて下へ侍賀とて著く文章成爲
妙ものしやうるる侍賀哉
小暮と着せ俳社のため
とて猿々小暮を成りけしとて

ハヤ感も生ずて魂の入るる言句一々巧つて
瓦入も感動してどよよとてやまの誠り翁
のけむりや聖きよしとおもふ物一々
是ハ何ぞや瓦入こぞつて感心動ゆるとあれども
俳此の句は魂の入るる言句一々
ちりきり言句あるべし心もゆるし
神の字もたす
みといふる神魂と熟字や々
す一みといふる魂の精なるこの神
たちまらぬ形も思ふと叫ぶ猿も
うけらるる古詩も猿のありを
と作する女も一々江湖集介石
朋禪師靈隱聽猿

偈頌此心未歌最關情那更猿聲入夜類從此
飛來峰下寺又添多少斷腸人
巴東三峽巫峽長猿鳴三聲淚沾裳荆か
客猿の啼成すて慈悲を催さるる古詩
斷腸ハ悲哀愁傷の切なる言句
こころを養へ猿も小猿成をけし
形も眼あり
岩の下みづくする姿も悲しく
も出るる言句一々
も此実ハ翁のありハ魂の
むると讚美一々形容假借一々

ちりれに誠の人といふべし。ついでに、
ふりし世にほく人の力のくも、何れの人か、
あるまじき事をも生かす。死に人を、
とあるぬやうに、世間を、
の序文、
日月の競弄、俗法、
着ん、
文と、
向の、
猿、
或人の、

ついでに、
部正、
と記、
より、
人の上へ、
に、
序文、
子の、
方、
起て、

その罪をゆるぎし一子のみを文と佛賜の風土
荒涼許六小枝を子由支考素就て余も猶多し
根も道翁の稿をうとく道翁乃末流と濁るるのまら

猿蓑片し巻之一終

